
闇に消えた組織

海星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

闇に消えた組織

【Nコード】

N5986M

【作者名】

海星

【あらすじ】

組織の秘密を解き明かそうとしている天魔。それは、天魔は組織と

すごい関係しているから。そして、天魔のパズルピースを埋めるため。

これは天魔そして仲間達、組織との壮絶な戦いである。

プロローグ 闇に消えた組織（前書き）

初めての推理小説です。駄目駄目だとおもいますが、読んでみてください。

ブローグ 闇に消えた組織

ここは未来の日本

今、日本は技術が発展し、日本全体が、大騒ぎだ。

そして俺はごく普通の高校生。黒髪でボサボサヘアのきれいなルビーのようなきれいな色の瞳をしている。名前は、坂本天魔。だがこれは仮の名前。

俺は記憶喪失だ。ただの記憶喪失ではない。俺はだれかに襲われた。

そこから昔のことの記憶がなくなっている。

でも今は楽しい高校生活ライフを楽しんでいる。

キンコンカーンコン…

チャイムがなるといっせいに周りが騒ぎ出した。

となりのやつは、ゲームをやって遊んでいる。前は、ダチと話している。

俺は、寝ている。

トントン…

後ろを見ると、金髪でピアスをつけて、シャツをだして、腰パンで、さらにジューズを飲んでいる、

ダチだった。

『おいおい ナに寝てんだよ！！ つまんねえぞ』

『で、何の話だ？』

『噂で聞いたんだけど、“闇に消えた組織”って知ってるか？』

『闇に消えた組織…』

『噂によると、その組織は、昔は有名な組織だったようだが、突然組織は闇に消え』

裏組織となっているらしい。その組織関係者はすべて、行方不明。

または死んでいて、

その組織は、数々の事件にかかわっているらしい。』

そんな話聞いたことない話だな。俺は重そうな腰を持ち上げながら、立ち上がり家に帰った。

この時、天魔は何が起こるかもわかっていなかった。

マリオネットの悲劇――突然の死

そして数日たったある日の朝。 テレビをつけて、学校の用意をしながら食パンを食べていた。
すると・・・

『次のニュースです。 昨夜、椿山高校の新田幸太さんが自宅で自殺していたことが分かりました…』

椿山… 新田？

俺は食べかけの食パンを床に落とした。

新田幸太とは、あの金髪のダチのことだ。 俺は頭の中がぐしゃぐしゃになってしまった。

俺は、食パンをくわえて、かばんのチャックも閉めずに家を飛び出した。

学校に着くと、パトカーやマスコミの車でいっぱいだった。俺は小走りで門を抜けると、

マスコミがこちらを向き数十人で俺に向かって走ってきた。

『新田幸太さんのお友達ですか？ 新田さんはどんな方だったんですか？ ……』

カシャ カシャとフラッシュ音が雑音のように耳に入ってくる。

すると校長が小走りでこちらに来了。すると瞬時に反応し、忍者のように全員校長の方へ

向かった。

俺は逃げるように校舎に入り、教室に入るとクラスメートのみんながざわざわと騒いでいた。

俺は新田の席を見つめた。 ボーとしていると、担任の澤田真由子、

澤りんが入ってきた。

いつもは楽しい感じだが、さすがと悲しい顔をしている。

『はい 静かにして。』

いやな空気になった。

『みんなも知ってると思いますが、昨夜このクラスの新田君が死亡になりました。』

すると、またざわざわ騒ぎ出した。俺はまだこの話が信じれなくて頬をつねったり、自分ででこピンをしたりした。

『そして最低でも今週中は、マスコミがひどいので、今週は休みにします。申し訳ないけど、今日はもう帰ってもらいます。あと天魔くんは悪いけど、いっしょに職員室に来てもらいます。』

そして話が終わるとクラスメート全員が騒がしい感じだった。

俺は澤りんと職員室へ行くと…

『来たな。緊急会議を行う。悪いが天魔くんも一緒に参加してもらおう。』

校長が真剣な目つきで話していた。

『みんなも知ってると思うが、今日、新田幸太くんが自殺された。

そこで天魔くんに聞きたいことがある。』

『…なんでしょう？』

『新田君は、なにか辛いことや、憎んでいることなど、なにか言っていないかったか？』

マリオネットの悲劇――友が残した最後の言葉（前書き）

お願いだから読んでください。

マリオネットの悲劇――友が残した最後の言葉

『いや、なにも聞いていませんけど…』

『そうかい…』

校長は、眉を顰め困ったような顔をした。

『ああ… ありがとう天魔くん。』

そついうと、会議を進めた。

俺は内容も聞かず、ただただボーっとしているだけだった。

まだこのことを信じていない。だが、本当のことは分かっている。

ただ、信じたくないだけだった。

そしていつのまにか、会議をしている先生達は、職員室から姿が見えなくなった。

『天魔くん…。』

『……………』

『天魔くん！』

俺は驚きながら振り向いた。すると俺の担任の澤りんが立っていた。

『先生はみんな帰ったわ。天魔くんもはやく帰りなさいね。』

今日は本当にありがとう。』

『…そんな』

そついつて澤りんは職員室を出た。

俺は帰ろうとした。でもそのまえに教室へ戻った。

訳はないが勝手に体が動いていた。

教室に入ると、俺は教室の教卓の前に立った。

『…… なんて死んじゃったんだよ』

俺は、新田の席の前に立った。

自然に新田との思い出を思い出した。そして自然と涙が頬をつたった。

すると机のなかから、ガムが少しだけ見えていた。

そしてガムを手を持った。すると床になにかが落ちた音がした。

それはメモ用紙みたいな白い紙切れだった。

それを拾い裏を見ると… 俺は驚きと悲しみで手が震え、紙切れを落としていた。

裏に書かれていた言葉は…

『苦しい』

マリオネットの悲劇――友が残した最後の言葉（後書き）

次回楽しみにwww

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5986m/>

闇に消えた組織

2010年10月22日07時12分発行